

日本軍は人民を守る軍隊ではなかった

ソ満国境をなだれ込むソ連の大軍



ソ連軍の兵員は、およそ175万人、各種大3万門、戦車5000輜飛行機も5000機でした。

1週間で日本兵5万人死んだ

大本営と関東軍総司令部は自らは、「ソ連侵攻を国境で食い止めることは不可能」と判断して、満州南部・



朝鮮との国境付近に後退しながら、弱体部隊に対し「ソ満国境を死守せよ」「全軍特攻の精神をもって決すべき」と

要求しました。ソ連が参戦すれば、重戦車を先頭に進撃してくることは分っていました。だが、それを迎え撃つ重砲はほとんどありません。前線の兵士は、爆弾や手榴弾を身に縛りまた敵の戦闘車に飛び込む訓練をさせられていました。



棒の飛行機

戦闘機を小銃で撃ち落とす訓練もやっていた。軍の侵攻後、

わずか1週間ほどの戦闘で、日本軍は5万人が死んだとされます。日本軍は在満日本人を置き去りにしたばかりか、根こそぎ動員した補充兵を、ソ連軍の弾よけに使ったのです。

8月15日の「玉音放送」(終戦の詔)以降も満州では戦闘停止の指示が行き届かずソ連との戦闘が続いていました。日本軍が守るべき「戦陣訓」として「生きて囚の辱めを受けず」が生きているかぎり建前として降伏することができなかったのです。最後まで組織的に戦っていた第107師団に指示が伝わり戦いをやめたのは、8月27日でした。



急襲

迎え撃つ日本の関東軍は兵員約70万人、戦車は200輜、飛行機200機。兵員は半分以下、

戦車と飛行機は実に25分の1にすぎないものでした。

関東軍の兵力が最大になったのは、「開特演」のあと、1942年夏ごろで、75万人の兵力を擁していたが、精鋭部隊を1943年秋からフィリピン(東南アジア)など南方へ転用しはじめ、本土決戦準備のため内地へ移送が続き、翌年末には関東軍はすでに”張り子の虎”となっていました。

関東軍の弱体化を補うために、45年夏、18歳から45歳までの開拓団や青少年義勇軍など留邦人男子20万人を根こそぎ動員して穴埋めしました。兵員は計算上約70万人となりましたが、年輩の「老兵」も多く、編成・装備は劣り、訓練も不十分な水増しの兵力でした。兵装は貧弱で主力小銃は旧式の「三八式歩兵銃」です。それすら、日本軍兵士全員には行き渡らず、なかには小銃がほとんどない連隊、機関銃が定数の半分もない部隊もありました。

新京では召集令状に「各自、かならず武器となる出刃庖丁類およびビール瓶2本を携行すべし」と記されていました。出刃庖丁は棒の先に縛って槍の穂先にする。ビール瓶は火炎瓶に転用するためのものでした。(佐藤清著『画文集シベリア虜囚記』より)